

特集



発達心理精神科学教育研究センター 主催 公開セミナー

## なかなか大人にならない若者たち— 成人形成期 Emerging adulthood の意識と アイデンティティ形成、イタリアの場合

**発** 達心理精神科学教育研究センターの主催で、7月30日（土）、イタリアの Milano-Bicocca 大学研究員であるクロチェッティ・エリザベッタ先生をお招きし、公開セミナー「なかなか大人にならない若者たち—成人形成期 Emerging adulthood の意識とアイデンティティ形成、イタリアの場合」を開催しました。本学学生や学外の心理・教育関係者など約30名の参加がありました。

前半の講演では、クロチェッティ先生がイタリアで行われた研究についての報告が行われました。大学生と労働者の双方に調査を実施したところ、アイデンティティ形成において、大学生は政治への関与の大きさが関連しているのに対して、労働者ではより宗教への関与の大きさが関連していることなどが示されました。そして、アイデンティティの形成や大人になることに関しては、文化的文脈を重要視する必要があること、個人内の適応や対人関係における適応と相互に関連しあっていることの重要性を指摘されました。

後半の討論では、京都大学大学院生の畑野快君、名古屋大学大学院生の杉浦祐子さん、大阪教育大学教授の白井利明先生、当センター准教授金子一史の4名が、指定討論者として質疑応答を行いました。フロアーからの意見に加えて、指定討論者による日本でのフリーターや就職活動の現状についての情報も提供され、青年のアイデンティティ形成に関連する要因などについて、有意義な討論が行われました。ここにその一部を紹介いたします。

今回は、成人形成期 (emerging adulthood) のアイデンティティについて、お話します。成人形成期という概念は、Arnett によって2000年に紹介されました。一般的に、青年期とは、10歳からおおよそ18歳までをさします。これに対して、成人形成期は、おおよそ18歳から29歳までをさします。心理学では、青年期と成人形成期は、異なった発達期間であると考えられています。



## なかなか大人にならない若者たち

## 成人形成期 Emerging adulthood の意識とアイデンティティ形成、イタリアの場合



私は、アイデンティティの3次元モデルを提唱しています。第1の次元は、コミットメントです。これは、様々な発達の領域において自ら選択をし、その選択に自信を持つことです。第2の次元は、深い探求です。深い探求は、自身のコミットメントに関連する活動を検討し、自身のコミットメントについてのさらなる情報を探求することや、他者と自身のコミットメントについて話し合っているかという次元です。第3の次元は、コミットメントの再考です。現在のコミットメントを変更するために、現在のコミットメントを、代案となるコミットメントと比較することです。アイデンティティの3次元モデルは、一般の青年に適用することができます。私たちは、アイデンティティの3領域を測定するために、Utrecht-Management of Identity Commitments Scale (U-MICS) を新たに開発しました。

私たちは、成人形成期の学生と労働者におけるアイデンティティの発達を調べています。本研究の対象は、大学生245名と労働者227名でした。アイデンティティを測定する尺度としてU-MICSを使用し、教育領域・関係性領域・仕事領域・政治領域の4つの異なった領域について、コミットメント・深い探求・コミットメントの再考の3次元で尋ねました。この他に、宗教におけるコミットメントを測定する尺度として、宗教コミットメント尺度を使用しました。

その結果、アイデンティティの3次元の中では、深い探求が、最も重要な次元となっていることが示されました。学生にとっては、教育領域が、労働者にとっては仕事領域が、最も重要な領域となっていることが示されました。関係性領域は、学生と労働者の双方にとって重要な領域となっていることが示されました。男女で比較したところ、女性にとってより重要な領域であることも明らかになりました。政治領域は、調査者のうち5%しか関与していませんでした。男女で比較したところ、男性の方が政治への関与は高くなっていました。

宗教に関してですが、学生の50.6%、労働者の60.4%がカトリック信者でした。女性は、男性に比べて、より宗教へのコミットメントが高くなっていました。また、労働者は、学生に比べて宗教へのコミットメントが高くなっていることが示されました。

学生と労働者において、社会的な領域と関係性領域が、イデオロギーの領域と関連が深いという類似性が認められました。ただし、イデオロギーの立ち位置では異なっていること、つまり、学生はより政治領域に関与している一方で、労働者は宗教へより関与していることが明らかとなりました。

次に、恋愛関係が成人形成期の大学生と労働者の幸福感 (well-being) にどのような影響を与えるかについて紹介しましょう。ここから紹介する内容は、日本の皆さんにも当てはまるのではないかと思います。本研究の対象は、大学生154名と労働者211名でした。U-MICSと、well-beingに関する尺度、恋愛関係に関する尺度に回答を求めました。

その結果、大学生と労働者では、恋愛関係と幸福感との関係は、異なっていました。労働者については、パートナーと良好な恋愛関係にあると、well-beingも高くなっていました。大学生にお

いては対照的な結果が得られています。つまり、パートナーと良好な恋愛関係にあると、well-beingが低くなっていたのです。

私たちは、この理由を検討するために、面接を用いた質的研究も実施しました。多くの大学生にとって、自分の将来を考える際に、時にはパートナーが障壁のように感じる場合があることが明らかになりました。例えば、海外に留学しようとした場合や、修士号を取得しようとして遠く離れた都市への進学を希望した場合に、パートナーは賛成しないという場合があります。なぜなら、パートナーはこれまでと同様に頻繁には会えなくなるからと考えるからです。

つまり、大学生は、将来を見据えた時に、パートナーとの良好な関係を脅威に感じるようなようです。その一方、労働者にとっては、パートナーとの良好な関係を築くことは、自身の将来にとって非常に大切なステップとなります。

最後に、ぜひ覚えておいて頂きたいことを述べます。第1に、様々な文化的文脈の中で、成人形成期を検討する必要があることです。成人形成期の特徴については、多くの場合アメリカで得られた知見から出発することがありますが、そのままでは他の国々に当てはまりません。第2に、アイデンティティと個人的社会的適応は相互作用することを考慮する必要があります。最後は、同じ文脈での異なるグループを検討することが望まれます。例えば、今回紹介した大学生と労働者の違いなどについてです。

## Message

## クロチェッティ先生からのメッセージ



私の名古屋大学での経験は、非常に充実したものとなりました。私は、客員教員として滞在していた期間に、成人形成期と成人期への移行についての、イタリアと日本の大学生を対象とした比較研究を実施しました。若者の発達の軌跡について、全く違った文化的文脈にありながら、いくつかの類似点が認められ、非常に興味深かったです。

7月30日に名古屋大学で催したレクチャーでは、イタリアで行っている成人形成期の研究成果について紹介しました。レクチャーでフィードバックを受けたのも、貴重な経験となりました。なにより貴重だったのは、日本の文化的文脈についての新しい洞察を得ることができたことです。指定討論者や参加者の有益なコメントに感謝いたします。皆さんのおかげで、日本の実情についてのより深い理解を得ることができました。

名古屋大学での経験によって、アイデンティティ・プロセスの比較文化的研究を、今まで以上に進めたいと思うようになりました。それと同時に、魅力的な日本の文化をもっと深く知りたくくなりました。



## 平成23年度地域貢献事業報告

自閉症スペクトラムの子どもを対象とした  
自己理解プログラムの開発

～地域の子育て支援事業の中に位置づけた取り組みとして～

## 事業の目的

本事業は、地域貢献事業の一つとして、NPO 法人子育て支援を考える会 TOKOTOKO と連携し、夏休みの余暇支援事業の中に、心理教育的プログラムおよび、親のワークショップを開催し、地域に根差した発達障害児の支援プログラムを構築することを目的としたものである。

## 発達障害児の自己理解の必要性

発達障害とは、発達のプロセスにおいて何らかの困難さを抱える子どもたちを総称として使われることが多いが、平成 17 年に施行された発達障害者支援法の中では、「発達障害」は、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして定義された。最新の研究から、発達障害は epigenetic な関与が非常に大きいということが明らかになってきており、診断がついてから支援が始まるのではなく、その特性を持っている子どもたちに地域の中で、親の子育てと子どもの発達を支援することで、将来の適応の障害を防ぐことを目的とするという方向に対応や支援のありかたがパラダイムシフトしてきている。親の子育てと、子ども本人に対する支援の両輪が必要で、どちらか一方の支援では不十分であり、子どもの年齢段階に応じた、いくつかの支援の層の積み重ねを考えていかなければならない。

中でも自閉症スペクトラムの子どもたちは、他者とのかかわりの中で自分をとらえることが苦手なために、自分の感情をつかんだり、自分の得意さ・不得意さを理解しづらく、そのことが自己肯定感を低下させたり、二次的な不適応につながりやすいことがこれまでの研究から明らかになってきている。そこで、自己への意識が向き始める小学校高学年の子どもたちに、自分の個性をポジティブな体験の中でとらえ、うまくいく体験を積み重ねていくとともに、適応的なスキルを修得できていけるような心理教育的プログラムの導入と、親が子どもの特性を理解し、より良い対応の仕方を身につけてもらうためのワークショップを並行開催することとした。今回のプログラムは、子どもの個々の問題または課題の解消ではなく、具体的な対処方法、考え方を自ら身につけていけるようなきっかけ作り、また親が対応方法を理解するとことを目的としている。

## 「自己を育む支援プログラム」

子どもは、小学校も高学年になると、周囲と自分を比較するようになります。特に、友達とうまくコミュニケーションがとれない、自分の気持ちや考えを上手に表現できないタイプのお子さんは、周りの人と関係を持ちながら自分のことを客観的にとらえることが難しく、必要以上に自信をなくしてしまうことも少なくありません。そのようなお子さんを対象に、「自己を育むプログラム」として夏休みを利用した支援事業を実施させていただきたいと考えています。プログラムでは、お子さん一人ひとりが、自分の得意や不得意、自分の中にある様々な気持ち、周囲の人との関係について考え、それを他のお子さんと一緒に表現するという活動を実施する予定です。プログラムを通して、お子さんが少しでも自分の様々な側面を発見することにつなげていくことを目指しています。

また、このプログラムでは、お子さんへの支援プログラムと並行して、プログラムに参加するお子さんの保護者向けワークショップも開催します。お子さんの特徴や課題の把握の仕方や関わり方について考えていきます。本事業の趣旨にご賛同いただける方の参加をお待ちしております。

対象：小学校3年生以上で通常学級に通うお子さんとその保護者

- ・友達や大人とのコミュニケーションがうまくとれない
- ・自分の気持ちや考えについて上手に表現することが難しい

定員：8名

参加費：3000円（事前の面接、フォローアップ面接を含む）

場所：知多市社会福祉協議会 会議室

注意：プログラムに参加を希望される方は、全8回の支援プログラムの他に、事前の面接（2回）とフォローアップ面接（1回）にもご参加いただくことになります。

日程	お子さん向け	親御さん向け
6～7月	心理検査を含むアセスメント (1回) プログラムの説明と目標の確認 (1回)	お子さんの特徴や課題など、状況確認 (1回) 心理検査の報告とプログラムでの目標の確認 (1回)
7月29日、8月5日、9日、16日、19日、23日、26日、9月3日 16時から18時	自己理解プログラムの実施（全8回）	親御さん向けワークショップ（全8回） ・子どもの現状把握 ・子どもへの関わり方 など
9月から10月	フォローアップ面接（1回）	フォローアップ面接（1回）

プログラム責任者：永田雅子（名古屋大学）

プログラム実施担当者：吉橋由香（岐阜聖徳学園大学）、田島さやか（日本福祉大学）

## プログラムの実施

自己理解プログラムのポスターを作成し、障害を抱える子どもと親の会である「イルカくらぶ」を通して、参加者を募集した。参加者の条件は、1. 小学校高学年であること、2. 通常学級に在籍していること、3. 友達とのコミュニケーションややりとりで困難さを抱えていることの3つである。これは、プログラムを効果的に実施するには、自分に目を向け、言葉として表現できるだけの発達をしていることが必要であり、低学年では、課題が難しいことが予想されたこと、小グループでグループ内での力動も効果的に実施するため、同じ発達レベルと課題を抱えている子どもたちを対象として設定した。

## プログラム内容

支援の目標を下記のように設定し、8回のプログラムを設定した。親のワークショップの内容も、子どものプログラムに準じる形で実施し、子どもの課題を通して、理解が深まるように工夫をおこなった。

### 子どもに対して

- ①自分の得意なことを知り、その活かし方を考える
- ②自分の苦手なことを知り、その補い方を知る
- ③ソーシャルサポートに気づく
- ④他者との関係の中で自分を捉える

### 保護者に対して

- ①自分自身のことを理解する
- ②子どもの特徴について理解する
- ③かかわり方の枠組みがつかめる

回	テーマ	ねらい
1	自己紹介	自分を紹介する。お互いのことを知る
2	いい気持ち・嫌な気持ち	いい気持ちと嫌な気持ちについて自分の体験とつなげて考える
3	自分が頑張っていること	自分が頑張っているところやいいところについて考える
4	好き・嫌い・得意・苦手	自分の好き・嫌い・得意・苦手について考える
5	助けてもらえること・助けてあげられること	困ったときには助けてもらえること、自分も誰かを助けてあげていることを知る
6	あなたの周りにいる人たち	周りにはどんな人たちがいるか考えてみる、みんなちがってみんないことを知る
7	周りからみた自分	自分が思う自分と人からみた自分は違うことを知る
8	振り返りとまとめ	これまで考えてきたことを振り返る



## 今後の課題

今回、地域の夏休みの居場所事業の一つとして、自己理解プログラムを実施した。子どもたちは、全員、毎回楽しみに参加をしてくれ、グループとしての活動も、回を追うごとに可能になった。また保護者も同じ課題を並行して実施することによって、子どものもっている苦手さを理解し、対応の工夫を実感として得られる機会になったようである。今回の試行をもとに、子ども用、および親・指導者用のワークブック（写真1）を作成した。プログラムに参加した者だけではなく、学校現場や家庭の中でも応用可能なプログラムとして展開していきたいと考えている。

自閉症スペクトラム障害をはじめとした社会性の困難を抱えている子どもたちの多くは、定型発達の子どもたちであればわざわざ教えてなくてもいいような課題について、一つ一つ丁寧に向き合いながら獲得していけるような支援の取り組みが必要不可欠である。子どもの年齢段階に応じて、親と子どものそれぞれニーズにあわせた支援メニューを構築していくことで、具体的な取り組みを模索していきたいと考えている。



事業責任者：永田雅子（発達心理精神科学教育研究センター）  
 プログラム責任者：吉橋由香（岐阜聖徳学園大学）/ 田倉さやか（日本福祉大学）





# 活動報告

2011年度 研修会・講演など（センター主催・共催分）

平成23年 6月25日（土）

公開講演

「フィンランドの子育て環境と幼児教育・  
日本人心理学者による母親体験から」  
教育発達科学研究科・東海心理学会との共催

講師：竹形理佳（ヘルシンキ大学 行動科学部特任教員）  
場所：名古屋大学教育学部  
大講義室



7月29日-30日

NBAS（ブラゼルトン新生児行動評価）  
イントロダクションコース（名古屋版）

講師（NBAS トレーナー）：  
永井幸代（名古屋第二赤十字病院 医師）  
大城昌平（聖隷クリストファー大学 理学療法士）  
永田雅子（発達心理精神科学教育研究センター 臨床心理士）

場所：1日目 名古屋大学教育学部 G 演習室  
2日目 名古屋大学医学部附属病院

7月30日

公開講演

なかなか大人にならない若者たち  
—成人形成期 Emerging adulthood の意識と  
アイデンティティ形成、イタリアの場合—

講師：Dr. Elisabetta Crocetti  
(University of Milano-Bicocca, Italy)

場所：名古屋大学教育学部 第3講義室

8月2日（火）14：00～16：00

「発達障害児の特性を理解した関わり  
—学童期を中心に—」

講師：名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター  
特任准教授（児童精神科医師）  
野邑 健二

場所：蟹江町中央公民館分館  
(産業文化会館) 4階大会議室



9月18日（日）13：30～16：00

MR グループ（重度心身障害児療育グループ）同窓会

場所：教育学部 第3講義室  
参加者：ご家族12家族 & スタッフ OB・OG22名

平成24年1月27日

早期からの発達支援のために  
—5歳児健診の実践報告と有効性の検討  
蟹江発達支援プロジェクト 中間報告会

講師：

小枝達也（鳥取大学地域学部教授 小児神経科医師）  
小島里美（蟹江町保健センター係長 保健師）  
岡田香織（名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター  
特任研究員 臨床心理士）  
下井節子（駒ヶ根市子ども課母子保健係長 保健師）  
野邑健二（名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター  
特任准教授 児童精神科医師）

場所：蟹江町中央公民館分館（産業文化会館）4階大会議室



## 来年度予定

Skokauskas, Norbertas

Trinity College Dublin (アイルランド)

分野：児童精神医学

研究テーマ：発達障害及びインターネット依存

受入期間：平成24年2月1日～5月31日

Wiguna, Tjhin

University of Indonesia (インドネシア)

分野：児童精神医学

研究テーマ：発達障害の比較文化的精神医学研究

受入期間：平成24年11月11日～平成25年1月10日

Keskinen, Soili Rauni Hannele

University of Turku (フィンランド)

分野：発達心理学

研究テーマ：子どものメンタルヘルスと学校環境に関する研究

受入期間：平成25年3月1日～4月30日



## スタッフ紹介

### ■センター長・児童精神医学分野



**松本真理子**  
 教授・臨床心理学  
 ●研究テーマ：  
 ・子どものメンタルヘルス支援  
 ・子どもの心理アセスメント  
 ・学校臨床心理学

### ■児童精神医学分野

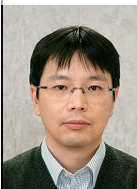


**本城秀次**  
 教授・児童精神医学  
 ●研究テーマ：  
 ・児童青年期の精神的問題  
 ・乳幼児精神医学  
 ・発達精神病理学

### ■母子関係援助分野



**永田雅子**  
 准教授・発達臨床心理学  
 ●研究テーマ：  
 ・周産期の母子臨床  
 ・発達障害の臨床  
 ・乳幼児精神保健



**金子一史**  
 准教授・発達臨床学、臨床心理学  
 ●研究テーマ：  
 ・産後うつ病および産後愛着障害への介入  
 ・近赤外線分光法を用いた母親と乳児の相互作用の検討  
 ・児童期のメンタルヘルスに関する日本とフィンランドとの国際比較研究

### ■学校カウンセリング分野



**鶴田和美**  
 教授・臨床心理学  
 ●研究テーマ：  
 ・大学生への心理的援助



**鈴木健一**  
 准教授・発達心理学、臨床心理学  
 ●研究テーマ：  
 ・学生相談における対人関係精神分析の援用

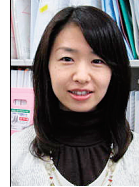
### ■軽度発達障害分野における治療教育的支援事業



**野呂健二**  
 特任准教授・児童精神医学  
 ●研究テーマ：  
 ・発達障害の臨床  
 ・乳幼児の発達支援  
 ・発達障害児の家族のメンタルヘルス



**福元理英**  
 特任助教・臨床心理学  
 ●研究テーマ：  
 ・学校臨床心理学



**岡田香織**  
 特任研究員・発達心理学、臨床心理学  
 ●研究テーマ：  
 ・発達障害の臨床  
 ・子どもの発達、メンタルヘルス支援



**田中裕子**  
 特任研究員・発達心理学、臨床心理学  
 ●研究テーマ：  
 ・特別支援教育における心理士の専門性についての検討  
 ・認知特性に配慮した学習支援方法や教材の開発  
 ・学習支援の実践と情緒的効果についての検討



### ●編集後記

このたび、発達心理精神科学教育研究センターニュースの第3号を、無事に発刊することができました。発達心理精神科学教育研究センターには、客員教員のポストがあり、定期的に諸外国の研究者が赴任しています。2001年に発達心理精神科学教育研究センターが設立されてから、これまでに13名を招聘しました。24年度以降も、既に3名の外国人客員教員の赴任が決定しています。いずれも、海外の第一線で活躍する研究者です。今回ご紹介した学生へのレクチャーに加えて、われわれ教員との共同研究も、複数遂行しています。近い将来には、彼らの元で学位取得を目指し、世界へ挑戦する若者が数多く出てくることを願っています。

発達心理精神科学教育研究センター 金子 一史

名古屋大学発達心理精神科学  
 教育研究センターニュース

NO.3・2011年度

KOKORO